例会記事

二月例会　二月二十七日（土）　順天堂大学医学部九号館一番教室

一、ヨーロッパの医学関係博物館について　安井広迪
二、解剖関係の資料紹介　酒井シヅ

三月例会　三月二十七日（土）　順天堂大学有山登記念館

（三月例会は呉秀三先生没後満五〇年記念シンポジウムとして行われた）

一、呉秀三先生の生涯と業績　岡田靖雄
二、私宅監置調査の現代的意義　吉岡真二
三、シーボルト研究史における呉先生の位置づけ　箭内健次
四、晩年の呉先生と私　緒方富雄

四月例会　四月二十七日（土）　順天堂大学医学部九号館一番教室

一、半井古仙の療治日記について　安井広迪
二、胞衣（えな）埋の起源について　蔵方宏昌

五月例会　五月二十二日（土）　順天堂大学医学部九号館一番教室

一、牛痘種痘法勧奨の絵ビラについて　添川正夫
二、医師免許制度（その二）——中世イギリスの医師免許について　安芸基雄

（追加発表）Current Research-menopanse from the standpoint of history and anthropology and contemporary medicine（医学史・人類学及び現代医学からみた更年期についての最近の研究）　Margaret Lock.

抄録

ペニシリンの歴史の新しい展開

(New Light on the History of Penicillin Roland Hare) Medical History 26: 1-24, 1982

ペニシリンの歴史の裏面を刻明に記した好論文である。原著者はロンドン大学の細菌学の名誉教授で、かつてフレミングと同じ教室で研究に従事していた。

原著者は「ペニシリンの進歩」（アレン・アンド・アンウィン社）と題する一書を一九七〇年に公刊したが、その時何故フレミングがペニシリンの臨床的価値を認めず、後にオックスフォード大学のフローリーがそれを発見したか不明であった。

原著者はフレミングの協同研究者であったクラードックの日記を発見し、この問題の解明に努めた。これによって従来フレミングによって行われたとされた研究の多々は、実はクラードックによって行われたものであることが判明した。

著者はこれについて、「発見」「カビの出所」「新物質の性質」「濃厚・純粋溶液作製の試み」「ペニシリンの臨床的価値の評価」「ヒトの感染症の治療」「その後の発展」の七章に分けて詳細に述べている。

ペニシリンを発見後三ケ月してフレミングは、彼が開発した方法でペニシリンの効果を検定したが、その結果ペニシリンが血中で急速に不活性化されることが分った。彼のこの実験法は結局は誤っていたのであったが、このためフレミングは、ペニシリンは表在性感染に対する塗布法のみが有効であり、注射などによる投与法は無効であると信じ、結果的には臨床的応用の名誉は、フローリーに与えられることになったのである。（抄読者　松木明知）